

### 第3章 研究を終えて

#### (1) 不登校の早期発見・早期対応のための教育相談研修会を実施して

毎回の教育相談研修会で、参加した教師が「子供のために」ということを意識して実習や演習を行っていることを感じる事ができた。この意識があるからこそ、教師は日常の子供とのかかわりを見直し、よりよい人間関係をつくることの重要性を再認識できたのではないだろうか。私自身も、児童生徒理解が、教師と子供との心の結び付きによって成される営みであることを再認識できた。今後も、児童生徒理解を深められるよう自らも研さんを積むとともに、子供と教師とのよりよい人間関係を基盤にした教育相談体制づくりを積極的に行っていきたい。

#### (2) 保健室等登校児童への対応を調査して

本研究を通して、保健室等登校児童が教室に入ることができるよう、多くの教職員が児童一人一人の話をよく聴き、児童を共感的に理解しながら支援を行っていることを実感することができた。教室登校できた児童の姿から、子供は本来自分自身で成長していく力をもっており、その成長を支援することが私たち教職員の責務であると改めて認識した。今後、自ら児童の自立を目指し、学校教育の根底を支える共感的理解の姿勢をもち続け、研修を深めていきたい。

#### (3) 不登校生徒にかかわる者の共通理解を図る手だてを考察して

これまでも私は、スクールカウンセラーや適応指導教室相談員の協力を得ながら不登校生徒への支援を行ってきたが、本研究を通して、支援にかかわる者はそれぞれの立場や役割は異なっても、「生徒の社会的な自立」という目標や「生徒を共感的に理解する」という対応の姿勢は同じでなければならないと、より強く感じる事ができた。特に教師は、連携を図る以前に生徒のありのままの姿を受け止め、支援できる資質を身に付けることが重要である。そして、教師と生徒、生徒同士の心の結び付きを重視した学級づくりを行うことが大切である。このことは非行傾向にある生徒の指導にも共通する。今後は、学校運営組織の中における中堅教員として、不登校生徒への支援や教育相談の体制づくりを推進していきたい。

今回の研究は、主に学校や適応指導教室等を対象として、不登校児童生徒への支援の在り方を探ったが、最近では、多様な学習の機会や体験の場を提供する民間施設やNPO等との連携も求められており、不登校児童生徒を社会全体で支援する必要性がますます高まってきている。今後は、このような現在進みつつある不登校児童生徒への支援の広がりや質的な変化をも視野に入れ、各自がそれぞれの教育実践の場で研究を継続していきたいと考えている。

最後に、多忙な中、研究に協力していただいた各学校及び各市教育委員会の方々に、深く感謝の意を表したい。